

# 1795年パリの憲法承認国民投票

—反対票の意味—

田 村 理

はじめに

「革命を終わらせる手段について Rapport sur les moyens de terminer la Révolution」。そう名付けられた報告で、1795年（共和暦三年）憲法に対する国民投票は提案、決定された。王制と身分制を核としたアンシャン・レジームとともに、ロベスピエールを中心とした革命独裁に至り、急進化しすぎてコントロールを失った革命を終わらせるために、国民投票が選択された。

ひるがえって21世紀の日本では、「戦後レジームからの脱却」を掲げて憲法改正を目指す安倍晋三氏が再び政権の座に着くと、改正手続を定めた日本国憲法96条を改め、国会による発議要件を緩めようとした。この96条改正に賛成する論者の中からは、「国会の発議要件を緩めても国民投票がある。発議要件緩和が民主主義に反するというなら、国民投票での改正成立要件を三分の二にあけてもよい」との見解も示された。国民投票への依存度、期待度はますます高まっている。日本国憲法を基礎とした戦後レジームを終わらせ、「日本を、取り戻す」ための国民投票が近づいている。

国民投票が、「民意による政治」を実現する側面とともに、ヒットラーや二人のナポレオンのように独裁的権力の正当化に用い得る諸刃の剣であることは、よく知られてきた。フランス憲法学では、同じ国民投票でも両

ナポレオンが用いたような信任投票の要素をもつものをプレビシットとよび、「民意による政治」を実現する手段としてのレフェレンダムと区別して、これを警戒してきたこともよく知られている。しかし、「強い政府」への指向、「行政までの民主主義」を求める動きの中で国民投票は定着していく。学界においてもかつてのような国民投票への警戒感は薄れている。

国民投票が仮にどれほど危険であっても、こうした流れに抗うことは不可能であろう。そうであるからこそ、初めての憲法改正国民投票に望む前に、今一度、憲法に正当性を与える国民投票の実態を歴史の現実の中で確認することを、本稿の課題としたい。その際、これまで憲法学で必ずしも目を向けられなかった「投票にのぞむ国民そのもの」にできるかぎりの焦点を当てて歴史を読み直す。

そのために、1795年に行われたフランス史上二回目の憲法承認の国民投票を、政治の中枢であったパリを題材に、一回目の93年のそれと比較しつつ検討する。

## 一 問題の所在

### 1. プレビシットとレフェレンダムを分かつ制度的条件論

日本の憲法学でも、国民投票がプレビシットに陥らずに「民意による政治」を実現するレフェレンダムとして機能する条件は何か、が論じられてきた。その条件を歴史的研究によって探ろうとするものに、乗本せつ子「フランス第一帝制確立期における人民投票制度の構造」<sup>1</sup>がある。乗本がナポレオン一世の人民投票をとりあげるのは、フランス憲法学がそれを「プレビシットの原型としてきた」<sup>2</sup>からである。

---

1 乗本せつ子「フランス第一帝制確立期における人民投票制度の構造」『法律時報』（55巻10号・昭和58年10月号）79頁～。

2 同論文79頁。

共和暦八年憲法を国民投票に付すことを定めるフリメール23日法前文は、国民投票を「最も迅速かつ最も容易に国民の欲求と正当な要求に応じる様式である」とし、同憲法の承認についての内務大臣の報告は「フランス人民は熱狂をもって共和暦八年憲法を承認した。彼らの信認と希望の同時的な表明は、人民の意思に関する疑いを一切許さないものである」とした。こうして繰り返しこれが「民意による政治」の手段だと喧伝された。

しかし、乗本はこの研究を通じて、「民意による政治」を確保するレフェレンダムを実現する「制度的条件」が満たされていなかったことを明らかにしている<sup>3</sup>。その条件とは、①統治者の越権に対する人民の監視の制度の存在、②人民投票発案権が特定の人物や単一の機関に独占されぬこと、③質問事項の民意に拘束された議会による十分な討論、④相対立する見解に関する言論と宣伝の自由の保障、⑤自由な投票のための投票の秘密、⑥中立的機関による集計、⑦法的拘束力をもつ人民投票であること、である<sup>4</sup>。

乗本の指摘する「制度的」条件は、いずれも国民投票を「民意による政治」を実現する手段とするために欠くべからざる重要なものである。しかし、こうした「制度的」条件を整えさえすれば、それは実現できるのだろうか。例えば、言論と宣伝の自由を制度上保障すれば国民は有意義な論戦を展開するのだろうか。普通選挙制度を保障し、秘密投票を実現して自由な投票ができる制度を用意すれば国民は投票をするのだろうか。憲法学は、「投票にのぞむ国民そのもの」のあり方を論じてこなかった。しかし、それは、国民投票を用いて自らを恣意的に正当化しようとする権力の意図を排し、「民意による政治」を実現するために、制度的条件と同じく重要ではないだろうか。

本稿は、こうした視点の欠落を1795年憲法の承認に関する国民投票を検

---

3 同論文80～86頁。

4 同論文86頁。

討することで埋める試みである。

## 2. 1795年憲法研究の欠落

1795年憲法は、国民投票で承認され、フランスで施行された最初の共和制憲法であった。しかし、フランス革命史学においても、憲法学においてもこの憲法は、関心を引かなかった。

フランスにおいては、200周年を記念して各地で行われた歴史家、法学者によるシンポジウムの記録が三冊<sup>5</sup>公刊されたが、まとまった研究書としては、M. トロペール Troper の *Terminer la Révolution française, La Constitution de 1795*<sup>6</sup>が、ほぼ唯一の公刊作品である。

日本でも、長谷川正安の『フランス革命と憲法』<sup>7</sup>におさめられた諸論稿（「第七章 反革命と1795年憲法」, 「第八章 テルミドール反動と1795年憲法」）の他は、辻村みよ子「ブルジョワか革命と憲法」<sup>8</sup>杉原泰雄編『口座憲法学の基礎 5 市民憲法史』が概要を整理し、中村義孝編訳『フランス憲法史集成』<sup>9</sup>が全訳とともに若干の解説をほどこしている程度である<sup>10</sup>。

---

5 Conac, G. et Machelon, J.-P. (sous la direction de), *La Constitution de l'an III Boissy d'Anglas et la naissance du libéralisme constitutionnel*, PUF, 1999. Bart, J., Clère, J.-J., Courvoisier, Cl., Verpeaux, M. (textes réunis par), *La Constitution de l'an III ou l'ordre républicain*, EUD, 1998. Dupuy, R., Marabito, M. (sous la direction de), *1795 Pour une République sans Révolution*, PUR, 1996.

6 Troper, M., *Terminer la Révolution française, La Constitution de 1795*, (Fayard, 2006).

7 長谷川正安「第七章 反革命と1795年憲法」, 「第八章 テルミドール反動と1795年憲法」『フランス革命と憲法』（三省堂・1984年）221頁以下。

8 辻村みよ子「ブルジョワか革命と憲法」杉原泰雄編『口座憲法学の基礎 5 市民憲法史』（勁草書房・1988年）53～55頁。

9 中村義孝編訳『フランス憲法史集成』（法律文化社・2003年）55～85頁。

10 この憲法の起草に関する諸問題については拙稿「11人委員会によるフランス1795年憲法草案の起草」『専修法学論集』（第108号・2010年3月）1頁以下。

さらに、この憲法を承認する国民投票については、日仏両国の歴史学、憲法学においても、A. ラジュザン Lajusan による「*La Plébiscite de l'an III*」と題する論文がほぼ唯一の研究である<sup>11</sup>。1793年憲法の国民投票については、フランスにおいては、R. バティクル Baticle によるまとまった研究「*Le Plébiscite sur la Constitution de 1793*」<sup>12</sup>の他に A. ソブール Soboul が *Les Sans-culottes parisiens en l'an II*<sup>13</sup>で、パリのセクションの対応について紹介している。日本でも辻村みよ子『フランス革命の憲法原理』<sup>14</sup>（日本評論社・1989年）が、バティクルの研究をベースにこれを紹介している。共和暦八年（1799年）憲法の国民投票についても先に紹介した乗本の研究がある。しかし、憲法が国民の承認に付されたフランス革命期の三回の国民投票のうち、1795年憲法のそれだけが、未だ日本では研究対象となっていないのである。まずは、この研究の欠落を埋めなければならない。

### 3. 制限選挙制の普通選挙権者による正当化

1795年憲法は、普通選挙制度を採用し、公的扶助を定めるなど平等を指向した1793年憲法と異なり、人権の宣言だけでなく義務の宣言をおき、制限選挙制をしくなど「左傾化した革命のコースをもとに戻す役割をもって制定され」<sup>15</sup>、「民主主義の進展を後退させブルジョワ支配を確立し、ブルジョワの利益を護る役割を担っていた」<sup>16</sup>と評されている。

特に選挙権、被選挙権の制限に注目していきたい。この憲法では間接選

11 Lajusan, A., «La plébiscite de l'an III», *La Révolution Française*, t. 60, janvier, février et mars 1911.

12 Baticle, R., «Le Plébiscite sur la Constitution de 1793», *La Révolution Française*, t. 57, 1909 et t. 58, 1910.

13 Soboul, A., *Les Sans-culottes parisiens en l'an II*, Librairie Clavreuil, 1958, pp. 66-79.

14 辻村みよ子『フランス革命の憲法原理』（日本評論社・1989年）121～128頁。

15 辻村前掲論文52頁。

16 中村義孝前掲書56頁。

挙制が採用されている。第一次集会で有権者はまず選挙人会の選挙人を選出する。その選挙人会が立法府の構成員等を選ぶ。選挙人を選ぶ第一次集会で投票しうる有権者は、満21歳以上で共和国領土に1年以上居住しかつ直接税、地租、または個人所得税を納めるすべての男性フランス市民とされた（第8条）。これに対して、選挙人に選ばれるためには、満25歳以上のフランス市民であることに加えて次のような収入の条件が第35条で付された。例えば、人口6千人以上のコミューンでは200労働日の地方価格に等しい収入と評価される財産の所有者、人口6千人未満のコミューンや農村では150労働日の地方価格に等しい収入と評価される財産所有者であること、である。この選挙制度を評してフランス革命史家柴田三千雄は、「91年体制にくらべると、少し資格制限が緩やかになって、いくらか有権者は増えていますが、被選挙権は逆に厳しくなって、91年体制に比べて二分の一に減っています。その資格をもつ者は全国で三万人くらい。つまり、選挙の裾野をひろげて統合をはかるとともに、政治権力を少数の富裕な者に限ろうという狙いです」<sup>17</sup>と述べた。

しかし、国民投票は1793年憲法と同様に、普通選挙制において投票資格をもつ者に投票が認められた。そして、その内容のブルジョワ性、非民主性にもかかわらず、1793年憲法同様、圧倒的多数で承認されている。それはなぜなのかは、憲法の承認や改正の際に行われる国民投票が果たしうる役割と効果を知る上で重要である。

このような目的にアプローチするために、本稿では、フランス国立文書館に収められているパリ48セクションの国民投票に関する史料（Archives Nationales BII 61）<sup>18</sup>を題材にして、1793年憲法の国民投票と比較しながら、「投票にのぞむ国民そのもの」を描きたい。

17 柴田三千雄『フランス革命』（岩波現代文庫・2007年）214頁。

18 本稿で特に註記をせずに引用、紹介する史料はすべて、AN, BII 61に収められているものである。

## 二 予備的考察

### 1. 国民投票の制度——フリュクティドール5日法第二章

パリについての具体的検討に入る前に、研究対象の国民投票がフランス全土でどのように行われたかを、ラジュザンの研究をもとに簡単に確認しておきたい。

95年憲法は冒頭に言及したフリュクティドール5日法で、新憲法の安定的な実現のために議員の三分の二を現職国民公会議員から選ばなければならないとするいわゆる「三分の二法」（フリュクティドール5日と13日デクレ<sup>19</sup>）とともに、国民投票に付することが決められた。同法第二章は憲法承認の国民投票の手続について次のように定める。

#### 「第二章 第一次集会への憲法の提出

第1条 共和国の全市町村への憲法送付後ただちに、第一次集会は召集される。

各県代理官は、遅くともフリュクティドール20日までに、いくつ

---

19 フリュクティドール5日デクレは、第二章で憲法の国民投票を定める前に、第一章において「新しい立法府の組織」について次のように定めた。

「第1条 立法府は、例年の刷新に関する憲法規定に定められた比率で、次回選挙人会によって選ばれた議員により構成される。

第2条 現在国民公会で活動するすべての議員は再選可能である。選挙人会は立法府を形成するために現職議員の中から最低三分の二の議員を選ばなければならない……」

また、そのための具体的な手続を定めたフリュクティドール13日のデクレは次のように定める。

「第1条 今月5日の法律第一章第1条、2条を執行する次回選挙人会は、まず立法府に選出するべき三分の二の議員を任命する。各選挙人会は、同法3条で除外された者以外なら、自らの県の現在の代表者からでも、他の国民公会のメンバーからでも選任しうる……」

かのカントンの首邑で行われた変更を除き、前回の第一次集会が行われたのと同じ場所で開会する。

第2条 前回第一次集会で投票したすべてのフランス人は投票権をもつ。

.....

第4条 事務局組織後ただちに権利及び義務の宣言と憲法が朗読される。

第5条 第一次集会は憲法全体について、承認又は不承認の意思表示をする。

第6条 各投票者は自らにとって適切な方法で投票する。

第7条 事務局は、議事録により投票者数と投票結果を証明する。

.....」<sup>20</sup>

95年憲法承認の国民投票の方法は、基本的にそれ以前の方法が踏襲され、選挙と同様にカントン（パリでは48のセクション）ごとに第一次集会という議会を組織して行われた。

## 2. 投票権者

特に注目すべきは第2条である。92年夏以降と同じ資格、すなわち男子普通選挙権を有するすべての市民に投票権が与えられた。ラジュザンの研究によれば、この点が問題視された第一次集会は全国で二カ所しかなかった<sup>21</sup>。モンプリエの第6セクションでは、選挙人になるために求められる資格が国民投票には必要だと誤解されていたため出席者が少なかった。そこで、同第一次集会は「すべての能動市民に第一次集会での投票権がある」ことを宣言したという。その結果、あらたに32名が参加した。ランド Lande 県のモニー Mony でも、選挙人の資格のない市民の排除が憲法の名の下に要求された。しかし、それ以外には大きな疑問が提示されることは

20 *Réimpression de l'Ancien Moniteur*, t. 12, pp. 5560-561.

21 Lajusan, op. cit., pp. 11-12.



なかった。

### 3. 投票者数

J. ゴドショ Godechot によれば、投票者数は全国的には93年憲法承認の国民投票が1,866,613名だったのに対し、1,107,000名と激減している<sup>22</sup>。93年の棄権者は約430万人、95年は500万人を超えたと考えられる。また、ラジュザンは95年の投票者数を939,000人と見積もっており、93年と比べて半減したとみなしている。そして、その理由として、①国民投票に国家防衛の意味がなくなったこと、②人々が政治的喧騒にうんざりしていたこと、③水害や収穫など地域的事情を挙げている<sup>23</sup>。

### 4. 審議

上記デクレは、憲法全体について oui か non で投票することを求めている（5条）。しかし、実際には各第一次集会では多くの討論が行われ、後にパリの事例でもみるとおり、多数の批判や修正案が示された。全国的には250以上の第一次集会で憲法への批判が提示されたとラジュザンは指摘している<sup>24</sup>。

### 5. 投票方法

投票方法についても、第6条は投票者が自らの望む方法で投票しうると定めた。これは、第一次集会に筆記による秘密投票と同時に声に出して投票する発声投票を認めた93年憲法16条を踏襲するものといえる<sup>25</sup>。ラジュ

22 Godechot, J., *Les Institutions de la France sous la Révolution française et l'Empire*, PUF, 1951 (4<sup>e</sup> éd. 1989), p. 467.

23 Lajusan, op. cit., p. 10.

24 ibid., p. 13.

25 こうした投票方法をめぐる様々な論点については、拙著『投票方法と個人主義——フランス革命にみる投票の秘密の本質』（創文社・2007年）を参照。

ザンによれば、大多数の議事録がどのように投票したかを明記していない。一つの投票方法の決定を求める提案が上記デクレを根拠に否定された第一次集会もあったが、それを強要したところもあったという。

また、Gers 県のマスーブ Masseube では、秘密投票で85票だった反対票は公開投票では3票にとどまった。これに対して、賛成票は秘密投票では3票にとどまり、公開投票では81票にのぼったという<sup>26</sup>。場所と状況によっては投票方法が投票結果に大きな影響を与えることもあった。

## 6. 投票結果

95年憲法は全国では1,057,390対49,978の圧倒的多数で承認された<sup>27</sup>。93年憲法は1,801,918対11,610で承認されているの比べると<sup>28</sup>、全体が約760万票減っている中で、反対票が約3万8千票増えていることを確認しておこう。

### 三 1795年パリの憲法承認の国民投票——93年憲法との比較

#### 1. 1793年パリの憲法承認の国民投票

##### (1) 反対票皆無の承認——まがいものの全員一致

次の表<sup>29</sup>は、95年憲法と93年憲法、それぞれを承認するかどうかを問わ

---

26 Lajusan, op. cit., pp. 14-15.

27 Godechot, op. cit., p. 468.

28 ibid., p. 286.

29 この表は、95年についてはAN, BII 61 に所収された集計表 *Dépouillement et recensement du vœu des Assemblées primaires et des armées pour l'acceptation de la constitution présentée au peuple français par Convention nationale*. Paris, Département de la Seine., 93年については同じくAN, BII 34 に収められた同様の史料を基礎に作成された。93年憲法の国民投票を行ったセクションの名前については、スペースの都合と見やすさに配慮して、95年時の名称に統一してある。

また、有権者数については、Soboul, op. cit., pp. 1093-1094 による。ソブールも

表 95年憲法国民投票結果：93年憲法との比較

セクション名	有権者数	1795年憲法					1793年憲法				
		投票総数	承認	否認	無効	結果	投票総数	承認	否認	無効	結果
キャンズ・ヴァン		617	603	8	6	承認		全員一致			承認
モントリユ		623	572	59	12	承認		全員一致			承認
ガルド・フランセーズ	3869	1830	1786	44		承認	1714	1714			承認
グラヴィリエ		1573	1515	68		承認		全員一致			承認
ブリュトゥス	2670	全員一致（票数明記無し）					1279	1279			承認
フォーブル・モンマルトル		1423	1423			承認	879	879			承認
アルシ		1368	1331	37		承認	866	866			承認
ロンパール	3490	1069	1034	36		承認		全員一致			承認
ボワソニエール	1886	1163	1142	17	4	承認	801	801			承認
ブラス・バンドーム	3540	1563	1493	29	4	承認	2219	2219			承認
モンブラン		1469	1465	4		承認		全員一致			承認
(フォーブル・デュ・) ノール		1553	1527	17	9	承認	1103	1103			承認
タンブル	2950	1154	1151	3		承認	969	969			承認
シテ		1553	1527	17	17	承認	1200	1200			承認
アンバリッド	2440	1237	1233	4		承認		全員一致			承認
ムゼウム	3318	1809	1803	6		承認	3400	3400			承認
ボンディ		902	899	3		承認	516	516			承認
ルベルティエ		1603	1521	75	7	承認	1891	1891			承認
シャン・ゼリゼ		885	849	31	5	承認	916	916			承認
ユニテ		2416	2392	24		承認		全員一致			承認
ドロワ・ド・ロム		1721	1652	63	6	承認	1738	1738			承認
アルスナル	3142	1395	1380	15		承認	364	362			承認
マイユ	3139	1398	1396	1	1	承認	355	355			承認
ボン・コンセイユ	5281	1670	1622	29	19	承認	2967	2967			承認
アール・オ・ブレ		1735	1665	29	6	承認	1475	1475			承認
チュイルリー		1741	1736	5		承認	826	826			承認
シャルダン・デ・プラント		1080	1038	21	21	承認		全員一致			承認
マルシェ	2724	1159	1147	12		承認	2300	2300			承認
ボパンクール	2594	858	846	12		承認	466	466			承認
リュクサンブール	4651	1820	1784	30	6	承認	912	912			承認
オブセルヴァトワール	4212	1032	996	29	7	承認	530	530			承認
アミ・ド・ラ・パトリ	4356	2175	2115	12	48	承認		全員一致			承認
レユニオン	4378	1526	1481	45		承認		全員一致			承認
コントラ・ソシアル	3224	1812	1765	38	13	承認	1211	1211			承認
テアトル・フランセ		2165	2078	74	9	承認		全員一致			承認
フィデリテ	3347	1527	1492	26	7	承認		全員一致			承認
ボンヌ・ヌーベル	4181	1256	1251	5		承認	935	935			承認
ビュット・デ・ムーラン	5031	2493	2459	30	4	承認	1130	1130			承認
ルエスト	4494	1697	1658	25	14	承認		全員一致			承認
アンディヴィズィビリティ	3599	1583	1432	126	25	承認	866	866			承認
フィニステール	3783	696	695	1		承認	1304	1304			承認
テルム・ド・ジュリアン		1336	1274	44	18	承認		全員一致			承認
フォンテーヌ・グルネル		1876	1844	29	3	承認	1594	1594			承認
ボン・ヌフ	1264	509	509			承認	503	503			承認
フラテルニテ	1614	671	652	19		承認	669	669			承認
ルール		1157	1100	29	8	承認	512	512			承認
オム・アルメ		1677	1581	32	64	承認		全員一致			承認
パンテオン・フランセ		1922	1864	58		承認	601	601	0	0	承認

れた各セクションの有権者数と投票結果である。まず一目でわかることは、93年憲法に関しては賛否の投票数を示さず「全員一致 l'unanimité」で承認したセクションが多いことである。パリ48セクションの三分の一弱にあたる15セクションを数える。さらに、否認票と無効票が一票もないことも目を引く。

では、実際に第一次集会はどのような様子だったか。パリ右岸中央に位置し、人民主権と直接民主制のイデオログ、ジャン・ヴァルレ Jean Varlet が拠点としたドロワ・ド・ロム・セクションの議事録をみてみよう。

「ドロワ・ド・ロム・セクションの市民は、第一次集会に集い、人及び市民の権利宣言と憲法の朗読をきいた。書記は、激しい賞賛に何度も朗読を遮られた。

朗読が終わると同時に、集会参加者一同は起立し、議場中にさらに大きな歓喜の声がなり響いた。『共和国万歳。共和国万歳。』

憲法の承認は全員一致であった。しかしより厳密に手続を行うために、第一次集会は以下のように決定した。市民は自己の氏名を記録させ、各人は点呼にこた

えて演壇に登り、名前と住所を述べた上で自らの意思を宣言する。  
 ……」<sup>30</sup>

熱狂のうちに憲法が承認される様子がよく描かれている。しかも、喝采で憲法を承認した後、「より厳密な手続」として指名点呼と公開投票を行い、全員一致であること、反対者のいないことをさらに権威づけている。

パリのサン・キュロットに関する著名な研究『共和暦二年のパリのサ

---

この数字は絶対的とは言えないと注釈しているが、加えてその他の数字とは出典が異なるため、厳密な一致は求められない。

30 AN. BII 23.

ン・キュロット』でソブールは、これを「まがいものの全員一致 l'unanimité factice」<sup>31</sup>と形容した。それは何故かをみる前に、議会の定めた制度は何を求めていたかを簡単に確認する。

## (2) 国民公会の求める制度

この国民投票は、次のような1793年6月27日のデクレによって決定された。

「第1条 フランス人民の承認に付される人及び市民の権利宣言と憲法は、すべての市町村、軍、人民協会に送付される。公安委員会は軍に派遣された人民の代表と将軍にそれらを伝達する責任を負う。

第2条 このデクレを受理して一週間以内に、人権宣言と憲法は召集された第一次集会の承認に付される。

第3条 第一次集会は、これまでと同様に各カントンの首邑で開催される。

第4条 フランス人民は、この憲法の第一次集会の章における第20条で定められた定式で、その意思を表明することを求められる。

第5条 投票集計の後、各第一次集会は議事録の写しを国民公会宛に送付する。また、8月10日の共和国の統一性と不可分性の祭典に一名の市民を派遣する。派遣される市民は、公務員、民事及び軍事吏員から選出することはできない。

……」<sup>32</sup>

先に紹介した95年憲法に関するフリュクティドール5日法に比べると、審議の有無、投票方法など、様々な手続についての定めを欠いている。結

31 Soboul, A., *Les Sans-culottes parisiens en l'an II*, Librairie Clavreuil, 1958, p. 66.

32 *Réimpression de l'Ancien Moniteur*, t. 16, p. 764.

果として、それらは各第一次集会の判断に任せられることになった。

### （３）投票にのぞむ市民

#### 審議

ソブールは、各セクションの第一次集会が投票に際して憲法と人権宣言について審議を行ったかについては次のように書いている。25セクションの議事録は、審議を行ったか審議なしに一括して投票に付したかを示していない。ボンディ、シャン・ゼリゼ、レピュブリーク、サン・キュロットの4つのセクションのみが逐条審議を行い、ポン・ヌフ、アール・オ・ブレ、フィニステールの3つのセクションも討論を行った。しかし、18セクションでは一括して権利宣言と憲法全体が承認に付させた。

ソブールは、審議なしの一括投票は、サン・キュロットの心性に対応するものだとする<sup>33</sup>。「いくつかのセクションでは、サン・キュロットの圧力は、一括サンクションを課することができるほど強くなかった」<sup>34</sup>。しかし、上述したボンディとレピュブリークの両セクションでも、条文ごとの投票を行ったが、十分な審議が行われたか否かは定かでない。シャン・ゼリゼ・セクションの議事録も「討論の後」条文ごとに投票が行われたとするのみである。サン・キュロット・セクションでは59条までは逐条審議したが、その後は討議をせずに承認している。

#### 反対者への圧力

ソブールは、「反対者が第一次集会で見解を示すことが多くの場合できなかったこと、そしてサン・キュロットは広く全員一致で憲法を採択したことが、圧力と策略により説明できる」<sup>35</sup>と述べる。

---

33 Soboul, op. cit., p. 68.

34 ibid., p. 69.

35 ibid., p. 72.

反対意見があったことが史料で明示的に確認できるセクションは5つしかない。例えば、ボンディ・セクションでは逐条審議の後、ある市民が市民の権利行使の停止の条件を定めた6条を否定した。フィニステール・セクションでは、「ほとんどすべての市民が同意を与えた」という記述がみられ、全員一致ではなかったことが示されている。

マイユ・セクションでは、682人のうち3名が指名点呼後の投票を拒否、324名が指名点呼にこたえなかったという。結果的に355名が投票し憲法を承認した。同様にビュット・ド・ムーラン・セクションも1235人の投票者のうち105名が指名点呼を棄権した。「このように、棄権は穏当だが決然とした反対の手段であった」<sup>36</sup>。

さらにソブールは、憲法の逐条審議や慎重な討論を求めたために逮捕されるなどの不利益を課された市民の事例を紹介している<sup>37</sup>。例えば、ルネ・モリヨン René Morillon は、「憲法の承認を長引かせ妨害するために」憲法を逐条審議しようと動議を出したために、オム・アルメ・セクションの革命委員会によって逮捕された。マイユ・セクションでは、反対派のリーダーの一人であるビュルテ Burté が「第一次集会が喝采により純粋な承認の意思を全員一致で表明したとしても」憲法の逐条審議をするべきだと主張して後に逮捕される。

#### 喝采による承認と公開投票

投票方法については、9つのセクションでは明示されていないが、6つが喝采による投票、4つが起立投票、18が有権者の指名点呼を行って投票、11のセクションは先にみたドロワ・ド・ロム・セクションのように、熱狂のうちに喝采で承認した後、有権者の指名点呼を行った<sup>38</sup>。さらにソブー

36 *ibid.*, p. 73.

37 *ibid.*, p. 74.

38 *ibid.*, p. 70.

ルは、指名点呼を行った後に発声投票を行ったセクションは29にのぼったと指摘したうえで、ここには憲法の承認に厳肅性を付け加えると同時に、反対意見を持つ者を暴き出す意図があったと述べる<sup>39</sup>。これによって反対者が圧倒的多数者の熱狂の渦の中で反対の意思表示をするのは極めて困難だったであろう。

こうして、「まがいものの全員一致」はつくられた。

## 2. 1795年パリの憲法承認国民投票

### (1) 反対意見・修正案の提示

先に93年の国民投票の様子を紹介したドロワ・ド・ロム・セクション第一次集会は、95年の国民投票をどのように行っただろうか。共和暦三年フリュクティドール26日の議事録でみてみよう。

「議長は人民に提示されたフランス憲法の承認または不承認に関する投票結果を発表した。

本セクション市民からなる1721名の投票者のうち、……

1652票は、『はい』または『承認します』の語によりこの憲法を承認した。51票は『いいえ』の語で否認した。2票は王制を要求した。他の1票は1789年の憲法を求めた。4票は暫定的に承認、別の1票は行政権担当者への被選挙権の規定を除き承認、1票は行政権に三日間に限って停止的拒否権を与えることを求めた。1票は軍を掌握している者を除いて亡命者に関する事柄を除外、そして6票は横線が引かれて何も書かれておらず無効であった。

第一次集会は、この憲法の承認が、フリュクティドール5日と13日のデクレに関する如何なる推測ももたらさないように、あらためて次のように

---

39 *ibid.*, p. 71.



宣言した。

先般採択されたアレテによって全員一致で二つのデクレを否認したので、今回の投票の対象は憲法の承認に限るものである。」

まず、51票の反対票が投じられていることが93年憲法との大きな違いである。議事録は憲法の承認に関する結果から記述されており、どのような審議があったのか、あるいは無かったのかは不明である。ただ、95年憲法を承認しない理由が示されているだけでなく、承認する票の中にも様々な修正案や留保が付けられている。熱狂のうちに憲法が全員一致で承認された93年とは全く異なる状況で投票は行われたと考えてよいだろう。

また、同時に承認に付された「三分の二法」が、憲法の承認にかなりの影響を与えている、あるいは与えうる存在であることが推測される。

## （２）投票にのぞむ市民

### 審議

それでは、この国民投票では、93年と異なり、慎重かつ丁寧な審議が行われただろうか。既に紹介したとおり、投票の方法を定めたフリュクティドール5日法第二章の5条は、「憲法全体への」一括投票を定めており、条文ごとの採決は法的には認められていないが、審議については特に定めがない。

パリ48セクションの第一次集会議事録の中には、憲法の審議についての記述は多くない。アール・オ・ブレ・セクションの議事録では、フリュクティドール23日、憲法の「朗読が終了し、討論に入った。この討論は24日まで続き、同日午後9時に終了した」との記述がある。これが憲法だけをとりあげて一定の時間審議を行ったことが確認できる唯一の記述である。憲法と同時に承認に付された二つのデクレ（「三分の二」法）があったためである。パンテオン・フランセ・セクションはフリュクティドール5日

法を否決した後13日デクレと憲法を数日にわたって討論した。ビュット・ド・ムーラン・セクションは、憲法とデクレについての長い討論の後、デクレは憲法と分けて議論することを決定した。ロンバル・セクション第一次集会のフリュクティドール21日、22日議事録にある次のようなやりとりは興味深い。

「一人のメンバーが、審議の順序を決めるために、憲法の討論とフリュクティドール5日デクレの討議を区別することを提案した。この動議は議論の後採択された。次に、憲法を優先することが求められたが、別のメンバーはデクレの優先を求めた。議論は活発に行われ長時間におよんだ。……憲法とフリュクティドール5日デクレの討論の優先順位についての議論が再開された。反対、賛成双方の多くの論者が見解を述べた後、討論の終了が求められ、議長はこれを投票にかけた。その後どちらを優先するかの投票が行われ、憲法が優先することが決定された。」

翌22日にはまたこの議論が再燃し、両論の発言が相次ぐ。それを受けて第一次集会はあらためて憲法を優先することを決定する。しかし、その決定の直後、ロンバル・セクション第一次集会には、フィデリテ、モン・ブラン、ボワソニエールなど、全セクションの約半数にのぼる23のセクションの代表団が次々に訪れる。そして、そのすべてが、「構成員全員に誰を議員に選任するかについての意見の自由を無制限に認めることに同意し、ほとんどすべてが、フリュクティドール5日法の第1章2条、3条を否認した」。これを受けたロンバル・セクション第一次集会は、再度「三分の二法」への意見表明もなされたが、討論の順序をまもって憲法の審議に入る。しかし、議事録には次のように記されるのみである。

「憲法について議論が開始されたが、憲法の承認を否定する論者は誰もあ

らわれなかった。」

憲法の審議を重視する者と、「三分の二法」に関する二つのデクレを重視する者がいて、かなりの議論が行われている。上記議事録には、憲法の朗読に長い時間がかかるため退席してしまう者が多数あり、誠実な議論ができないという問題提起もあることから、どちらを優先するかは、十分な審議をするために重要だったのかもしれない。

23ものセクションの代表団が「三分の二法」についての見解を述べに来たところからしても、この時期のパリ48セクションでは、「三分の二法」の方が大きな関心を集め、問題が多いと考えられていたことがわかる<sup>40</sup>。

このような状況の中で、ロンバル・セクション第一次集会では、憲法を優先させる決定をした。しかし、憲法の内容についての討論は十分に行われず、反対意見は一つも表明されないまま、投票に移行した。

## 投票方法

どのような投票方法を採用するかについてトラブルが生じたことを示す議事録はパリについては見あたらない。例えば、ルール・セクションでは原則筆記投票で oui か non を投票し、読み書きできない人は投票管理人に筆記させると決定したことが明記されている。この点について記述のないセクションも多数あるが、フリュクティドール5日法の定めるとおり、多くのセクションが発声投票と筆記投票の双方を、投票者に自由に選択させたと推測される。

ボンヌ・ヌーベル・セクションでは、1256人の投票者のうち1156人が発

---

40 例えばフィニステール・セクションでは、「三分の二法」は条文ごとに採決に付している。また、キャンズ・ヴァン・セクションをのぞき、47セクションが、主権者の自由な判断に制約を課し、人民主権の原理に反するものとして、これを否決している。

声投票し、全員が憲法を承認した。秘密投票を行ったのは110名、そのうち104人が憲法を承認、1名は条件付き承認、5名が不承認だった。

フォンテーヌ・グルネル・セクションでは、全1875票のうち、801票が筆記投票で投じられ、770票が承認、29票が不承認、白票が1票、1788（ママ）年憲法を求める票が1票あった。これに対して発声投票は1074票、全員が憲法を承認した。

アルスナル・セクションでは、1395名のうち1380名は発声投票を行い、全員が憲法を承認した。筆記投票を行った者は15名にとどまり、不承認は2名だった。

これらの3セクションと異なり、大多数が筆記投票をしたセクションもある。

ボンコンセイユ・セクションでは、1670人の投票者のうち4名だけが発声投票を行った。結果は1622名が承認、27名が不承認、19票が無効だった。

ロンバル・セクションでは259名が発声投票し、そのうち1名が不承認の意思表示をした。筆記投票は824名、776票が憲法を承認、34票が不承認、14票が無効だった。

発声投票による不承認が議事録に明記されているのはロンバル・セクションの一票だけである。パリでも、公開投票は承認に流れる傾向にあった。

### （3）内容に対する諸見解の表明

憲法の内容に関する十分な審議の記録はみられないとはいえ、第一次集会で様々な見解が示されたことは先に引用したドロワ・ド・ロム・セクション第一次集会議事録をみれば推測できる。このような投票結果に関する記述は、ドロワ・ド・ロム・セクションだけにみられたものではない。例えば、「最も保守的」としばしば形容されるル・ペルティエ・セクションのフリュクティドル25日付け議事録には次のような記載がある。

「1603名の投票者のうち1521名は純粹かつ單純に憲法を承認した。

11名はフリュクティドール5日と13日の両デクレとともに憲法を承認した。

8名は総裁政府構成員を任命する権限を人民に与えることを条件に憲法を承認した。

4名は国民公会全体の刷新を条件に憲法を承認した。

1名は修正なしに承認した。

1名は改訂なしに承認。

1名は支配的な状況にしたがって承認。

1名は条件付きで承認。

1名は条件付きで承認。 以上1539名が賛成。

39名は純粹かつ單純に否認した。

4名は虐殺者と強盜の出の者には何も望まないという理由で憲法を否決した。

1名は多数の支持が得られ、行政権についての修正が行われるなら1789年の憲法を求めた。

3名は王制に投票した。」

「保守的」と言われるセクションらしく、王制や立憲君主制を定めた1789年の憲法（正しくは1791年憲法）を求める反対票が投じられている。反対票の中にある「虐殺者と強盜の出の者」とは、おそらくジャコバン派を核とした国民公会のことであろう。他方、総裁政府を人民が直接選ぶべきだという「民主的」な主張もみられる。

次に、他ではどのような意見が憲法の内容について出されたかをみてみよう。

## 王制

パリで最も多く出された意見は、ル・ペルティエ・セクション（4名）やドロワ・ド・ロム・セクション（3名）でもだされた王制ないしは立憲君主制（1791年憲法）が望ましいとするもので、合計77票ある<sup>41</sup>。ジャルダン・デ・プラント・セクションの議事録では、王制を求める理由を明確に示す見解も記されている。

「1名は1791年憲法を、1名は古来のフランス憲法を、1名は直面する害悪のもっともすみやかな改善策であるとして正当な王であるルイ18世を求めた。また別の1名は共和制がフランスには合わないことを理由に反対した」。

## 亡命者の処遇

亡命者の処遇についてもいくつかの批判が示された。95年憲法の第373条は、「国民は、1789年7月15日以降祖国を放棄したフランス人で、亡命者に対する法律に定められた除外者に含まれない者がフランスに戻ることを如何なる場合も認めないことを宣言する。フランス国民は、立法府がこのことに関して新たな除外者を設けることを禁止する」と定め、さらに、「亡命者の財産は決定的に共和国に取得される」とした。

先に引用したドロワ・ド・ロム・セクションの他にアルスナル・セクシ

---

41 ビュット・デ・ムーランセクションで6票、ルエスト・セクションで2票、テルム・セクションで18票、パンテオン・フランセ・セクションで10票、コントラ・ソシアル・セクションで1票、ジャルダン・デ・プラント・セクションで4票、マルシェ・セクションで8票、ポパンクール・セクションで1票、オブセルヴァトゥール・セクションで5票、シテ・セクションで5票、ユニテ・セクションで6票、ボン・コンセイユ・セクションで2票。

他にビュット・ド・ムーラン・セクションでは立憲君主制の1791年憲法と共和制の1793年憲法を求める票が合計で5票、また、シャン・ゼリゼ・セクションでは元首 chef を求める票が1票あった。

ョンでも373条の修正を条件に憲法を承認する票が投じられていた。

### 行政府・議会構成員の報酬

王制や亡命者の帰国を求める保守的な意見ばかりが表明されたわけではない。

王制の次に多くの修正案が出されたのは、総裁政府のメンバーと議員の報酬に対するものだった。憲法68条は「立法府の議員は歳費を受け取る。歳費は、両議院において、上質の小麦3万kgの価値と定める」、173条は「総裁政府の構成員の待遇は、毎年上質の小麦50万kgの価値と定められる」としている。これに対してはチュイルリー（1名）、シャン・ゼリゼ（13名）、アルスナル（2名）の各セクションで批判が出された。直前のジェルミナルとプレリアルに「パンと93年憲法を！」と求める大規模な蜂起がパリでおこるような食糧事情で、これらの報酬は法外のものに思われただろう。アルスナル・セクションでは、議會議員数を300人に減らすとともに、議員の俸給は一日25リーブル、行政府の構成員は一日50リーブルとし、しかも小麦ではなくアッシニアで支払うようにあらためることを条件とした憲法承認の票があった。

### 総裁政府の組織

行政権すなわち総裁政府の組織に関するものも目立った。例えばチュイルリー・セクションでは、先に紹介したドロワ・ド・ロム・セクションと同様に40歳以上（134条）で「立法府の議員であった市民または大臣であった市民」（135条）という総裁政府構成員の被選挙資格への批判がみられた。また、ル・ペルティエ・セクションやシャン・ゼリゼ・セクションでは、行政府の長・総裁政府のメンバーを人民が直接選ぶ主張もみられた。ドロワ・ド・ロム・セクションでは行政権に三日間の停止的拒否権を与えるべきだとの意見があったことも既にみた。

## 議員数の削減

また、議会についてもその議員数が多すぎるとの主張もみられた。チュイルリー・セクションでは議員数を三分の一にせよとの提案、アルスナル・セクションでは300人に減らすべきだとの提案があった。

## 93年憲法の要求

制限選挙制度を採用したにもかかわらず、パリではこれに対する批判は一つも出されていない<sup>42</sup>。しかし、普通選挙制度を採用した93年憲法を求める票は、ビュット・ド・ムーラン・セクション（1791年憲法と合わせて5票）、オプセルヴァトワール・セクション（1票）、モントルイユ・セクション（1票）でみられた。

## 3. 1795年パリの国民投票の質的・数的変化

### （1）93年国民投票との質的相異

95年パリの国民投票は、「まがいものの全員一致」がサン・キュロットの運動により半ば強引につくりだされた93年それとは違っていた。95年には国民投票のために第一次集会に赴いた市民のうち1300人を越える人が反対票を投じている。投票者全体の3%を越える程度の比率だが、それが一票もなかった93年との違いは歴然である。

提案された修正案や反対意見も多岐にわたる。亡命者の帰国を認めない規定への批判は、テルミドール以降パリの街をはじめ全国でジャコバンや人民協会に対して暴動を起こしていた「金ぴか青年隊 *Jeunesse dorée*」の主張と重なる。王制を求める意見も多数表明されており、93年の国民投票とは異なり、こうした立場をとる者も投票に参加し、自己の意思を表明し

---

42 ラジュザンによれば、普通選挙制度の支持者は国民公会でも3名しかいなかった。パリでは制限選挙制度への転換に対して全く意見が出されていない（Lajusan, op. cit., p. 106）。



ていた。

総裁政府メンバーの被選挙権が厳格すぎることへの批判や直接選挙を求める主張には、政治への参加意識とそれをコントロールしようとする近代的な主権者意識をみることも可能だろう。48セクションのうち一つを除き、「三分の二法」を「人民主権に反する」として否決したことにもそれはあらわれている。

また、総裁政府を直接公選にし、それに停止的拒否権を与えるべきだとする主張には、革命独裁にまで至ってしまった議会の権限を制限しコントロールするために、総裁政府の権限と正当性を高めようとする思考もうかがわれる。

「民意による政治」の「民意」には王制や亡命者の帰国も含めた多様な見解、それに基づき憲法を否定する意見も当然に含まれる。この点に着目すれば、95年の国民投票は、これらの見解が一切表明されなかった一回目より望ましい条件のもとで行われた、と考えることができるだろう。

他方、制限選挙制についての批判は一つも表明されず、93年憲法を求める主張がいくつかあった程度である。これは、95年憲法の選挙権制限がゆるいものであったことも理由の一つだと推測できる。しかし、それだけでなく、次にみるように普通選挙制度を主張すべき者達が、その運動のリーダーを失い、投票に赴かなかった可能性が高い。

## (2) 投票にのぞむ市民のおかれた状況

「素晴らしき静寂」

二つの国民投票の相異を生み出すものを次の史料で確認しよう。これはボンヌ・ヌーベル・セクション第一次集会が議事録とともに国民公会に送った手紙である。

「ボンヌ・ヌーベル・セクション第一次集会は、諸兄のもとに以下のよう

に宣言するために代表を派遣します。当第一次集会は憲法については5名を除く全員一致で憲法を承認、フリュクティドール5日と13日のデクレについては三分の二の国民公會議員を強制的に選出とする諸規定は人民の主権を侵害するため全員一致でこれを否決いたしました。……

当第一次集会はまた、以下のように宣言いたします。人数の上で多数を占める労働者と職人たちは熱心かつ適切に議事に参加し、そこに王党派や暴動首謀者、九月の大虐殺参加者や物乞いの仲間は見出し得ませんでした。それどころか審議と採決は素晴らしき静寂の中で行われ、精神において極めて完璧な統一が支配したことを、パリの諸第一次集会に良き影響を与えるべく、貴国民公会の演壇でご報告いたしました。」

貧窮者が多く、サン・キュロット運動に大きな影響力をもったエベールが居住し、テルミドール9日のロベスピエール失脚以降もジャコバン派が勢力を維持したセクション<sup>43</sup>でも、「素晴らしき静寂」の中で審議と採決は行われた。多数を占める労働者や職人も適切に議事と採決に参加したことが強調されている。過激な王党派だけでなく、激しい民衆運動を主導した者やそれに従う者たちは国民投票には参加しなかったことをこの史料は示唆している。こうして熱狂による「まがいものの全員一致」を強要することなく、「適切な審議と採決」が行われる条件が整ったのである。その事実はひとまず積極的に評価できる。

「素晴らしき静寂」はどうつくられたか

しかし、この条件をつくりだすためには、「まがいものの全員一致」を強要する者を排除する必要があった。その一端を示すのは、プラス・ヴァンドーム・セクション第一次集会の共和暦三年フリュクティドール13日

---

43 Soboul, A. et Monnier, R., *Répertoire du personnel sectionnaire parisien en l'an II*, Publication de Sorbonne, 1985, p. 171.

付議事録である。

「第一次集会は、一切の即断を廃すべく、プレリアル3日法によって武装解除され、逮捕された個人で、依然としてセクションによって武装を認められていない者が第一次集会で投票しうるか、するべきかについて討論した。しかし、同集会は現在のところ治安維持のために、同会の内部で、みずから軽罪または重罪で告発した人々のことで苦しむことを望まなかった。

そこで、現在は、彼らに第一次集会の決議を欠席することを促す任務を議長に与えた。彼らは、討議と良心に従って自らを裁き、投票を行われなければ、専制下に犯された犯罪への恐怖が当然にも浸透した市民の中にいるのだと知るだろう。……」

テルミドール9日のクーデターから約半年後の1795年春、パリの食糧事情が悪化した頃、国民公会では執行停止したままの1793年憲法をどうするかが議論され始める。しかし、しばらくの間、国民公会はこれを決めることができずにいた。そして、ジェルミナル12日（4月1日）とプレリアル1日（5月20日）、パリの民衆は大規模な蜂起をおこし、国民公会に「パンと93年憲法」を求める。

特に後者のプレリアルの蜂起は規模も大きく、国民公会は最終的には軍隊を導入してこれらの動きを鎮圧した。そして、パリの各セクションに「悪しき市民」のリストを作成せよと命じた。これによって逮捕された活動家はおよそ1200名、国民衛兵から除籍された市民がおよそ1700名、「要するに、93年、94年の時期の民衆の活動家のほとんど全員がここで対象になって、逮捕ないし武装解除」<sup>44</sup>された。これにより、1795年憲法の国民投票を行う頃にはセクションは保守化していた。そして、ブラス・ヴァ

---

44 柴田三千雄前掲『フランス革命』213頁参照。

ンドーム・セクションの議事録が示すとおり、これに関わった市民のかなりの者は投票を認められなかったのである。

### （３）投票にのぞむ市民の変化

では、パリの国民投票参加者はどのように変化しただろうか。

すでに革命政府によるエベール派の排除などでパリの民衆運動は力を失っていた。さらにテルミドールの反動が追い打ちをかける。例えば、ブリュメール（1794年11月）にジャコバン・クラブや選挙クラブが閉鎖されると、これらが大きな影響力を持っていた民衆はセクションから遠ざかる。また、セクション総会への参加者に支払われていた日当の廃止、夕方に開催されていた総会の午後への繰り上げなどの制度的変更のため、セクションの構成が変化する。「下層市民の総会出席が公然と妨害されたことはない。しかし、以上の国民公会の措置に加えて、新たな有力者によって牛耳られる総会のブルジョワ的雰囲気は、下層市民達の足を自然に総会から遠のかせる結果となった。共和暦二年とは逆の現象がこうして生じたわけである」<sup>45</sup>。セクション総会の変化は、これを基礎として作られる国民投票のための第一次集会の構成にも質的な変化をもたらしたであろう。

### セクションごとの投票者数の変化

この変化は国民投票の数的変化にも影響を与えたはずである。前掲の表に基づいてセクションごとに93年の国民投票との比較で投票者数の変化をみると、95年に投票者数を半数近く減らしたセクションに、ミュージウム、ボン・コンセイユ、マルシェの3セクションがある。

では、投票数を増やしたセクションはどうか。まず4倍近くの投票者数が確認できるセクションがアルスナルとマイユの2セクションある。2倍

---

45 柴田三千雄『パブーフの陰謀』（岩波書店・昭和43年）84頁。

以上に投票者数を増やしたセクションに対象を広げてみると、チュイルリー、ビュット・ド・ムーラン、ルールとパンテオン・フランセの4セクションがある。

投票者数を大幅に減らしたセクションのうち、ミュージウム・セクションは、93年前半までは保守派の強いセクションだったが、共和暦二年テルミドール以降はサン・キュロットが力を持ち、共和暦三年プリュヴィオーズ30日までは弾圧にも抵抗した。しかし、同年フロレアル9日には93名もが武装解除されている<sup>46</sup>。投票者数を減らしたセクションの中でも、アルスナル・セクションは、民衆のセクションで、テルミドール9日以降も民衆の支配は続いた。しかし、共和暦三年ヴァントーズ10日以来保守派がセクションをコントロールし、プレリアル以降の抑圧は特に広範にわたり150人の市民に及んだ<sup>47</sup>。また、ルール・セクションは共和暦三年ヴァンデミエールまではジャコバン派が優位だった。しかし、ヴァントーズ10日には保守派が上層部を支配、ジェルミナルとプレリアルの蜂起後の弾圧は激しかった<sup>48</sup>。

セクションの状況の変化は、投票者を減らす方向にも増やす方向にも働いた。それでは、パリ全体の投票者はどのように変化しただろうか。

#### パリ全体の投票者数の変化

先にみたとおり、95年憲法承認の国民投票では、全国的には93年に比べて大幅に投票者数を減らしたが、パリの場合は少し事情が違ったように思われる。

前掲の表をベースにして史料で確認できる投票者数を試算すると、93年憲法の国民投票は24,894名が投票したのに対して、95年には35,102名であ

46 cf., Soboul et Monnier, op. cit., p. 111.

47 cf., ibid., p. 387.

48 cf., ibid., p. 61.

り、1万人の投票者が増えている計算になる。ただし、93年は投票者数を数えないまま全員一致で憲法を承認したセクションが非常に多くあり、ここに参加した市民をカウントできていないので、この数字は実態を反映していない。しかし、95年に投票者数が大幅に減ったということではなく、むしろ増えているものと思われる。

そう推測する一つの根拠は、投票率である。有権者数と投票者数がすべて分かるセクションについて（すなわち93年に全員一致で憲法を承認し、投票者数を明記しないセクションを除外して）試算すると、93年憲法の国民投票は37%であるのに対して95年は41%とむしろ投票率は上がっている。

#### 4. 93年との相異を生む要因——小括

圧倒的多数が憲法を承認したとはいえ、反対票も投じられ、反対意見や修正案も提示された95年のパリにおける国民投票は、反対票の一票もない93年との比較という観点からは評価しうる。一人でも多くの市民の参加をよしとする数的な観点からも、パリについては、投票率は微増しており、わずかではあれ93年よりも95年の方が状況はよくなっていた。

民衆運動の高揚とその圧力によって、93年には憲法に批判的な市民は投票できなかった。95年の場合は、このような圧力が少なく、それから解放された市民が第一次集会に戻り、相対的に自由な意思表示が可能となった。ただし、そのために民衆活動家の大規模な排除が行われ、民衆は93年と同様に投票権を与えられていても、セクションの運営や国民投票に参加することをやめてしまった。93年と95年の差を生み出したのは、制度上はどちらにおいても政治参加する権利を与えられた民衆である。

柴田三千雄は、ジェルミナルとブレリアルの蜂起が失敗に終わった理由として、93年とはちがって議会に民衆運動の受け皿がなかったことをあげ、「もともと民衆運動には、自分たちが議会にとってかわろうという意図は毛頭ない」<sup>49</sup>と指摘する。なぜなら、民衆運動は、当局は経済活動を統制

し彼らに生存を確保すべきだという「モラル・エコノミー」の観念を背景にもち、当局への期待と抗議という政治的意味合いを内包しているのであって、その政治の観念は「権威に対する神秘的な期待という非合理的な要素をも含んでいる」<sup>50</sup>からである。

権威に対する神秘的な期待という非合理的要素を含む政治観をもち、自らが政治を担う意図を毛頭持たない民衆は、93年にはそのリーダーとともに高揚の中で新憲法を承認し反対者に圧力をかけた。95年には自らの選挙権を失うことになろうとも投票を棄権したのである。

### まとめと課題

フランス1795年憲法の国民投票について、パリを題材にして93年のそれと比較しつつ、特徴を論じてきた。パリの場合、93年の憲法承認国民投票は反対票が一票も投じられないという意味では異常だった。これに対して、95年の国民投票は、少数ではあれ反対票が投じられ、反対意見や修正意見も多数示されていた、という意味で正常であった。この相異を生み出したのは民衆であった。サン・キュロット運動の高揚の中にあった93年とはちがって、95年のパリの諸セクションからはその圧力が排除された。その結果、多様な見解が第一次集会でも表明できるようになったのである。

辻村みよ子は、93年憲法の国民投票について、「当時の民衆の政治的未成熟度」などの限界を指摘しつつも、「全体としては、この憲法の制定手続きに、初めて主権者たる人民が参加したことの意義は測り知れないものがある」<sup>51</sup>と述べる。さらに「フランスのデモクラシーの理想形態」<sup>52</sup>であ

49 柴田前掲『フランス革命』213頁。

50 同書102頁。

51 辻村前掲『フランス革命の憲法原理』126頁。

52 Baticle, op. cit., *La Révolution Française*, t. 58, 1910, p. 410.

るとするバティクルの言葉を引用しつつ、「この言葉は、憲法制定についての人民投票制度が定着した現在でも、その意味を失っていない。この憲法は、その憲法原理の内容においても、なお『最も民主的な憲法』の地位を占め続けているからである」<sup>53</sup>とする。

確かに93年憲法は、憲法原理の内容においても最も民主的であり、初めて人民が憲法制定手続に参加した点でも歴史上重要な憲法である。しかし、反対者を排除して「まがいものの全員一致」をつくりだすことを「民主的」とみなすならともかく、人民が憲法制定手続に参加する制度を用意すればその手続が民主的に行われるとは限らない。また95年にそうだったように、制限選挙制という非民主的な制度が投票資格に何らの制限もない民主的な国民投票で正当化される可能性もある。そうであるならば、「民主的」であるがゆえにこれを肯定する論者からも否定する論者からも注目を集めた93年憲法に関心を集中することで満足するわけにはいかない。ブルジョワ的路線に回帰した95年憲法、それに対して行われた国民投票のような事象も研究対象とし、「民衆の政治的未成熟」をも正面からとりあげて描かなければなるまい。それは、国民投票を「民意による政治」の手段とするための方策を見つけ出すために欠くべからざる基礎的作業だからである。

95年の国民投票が、アンシャン・レジームからだけでなく革命独裁や民衆運動の喧騒から脱却して「革命を終わらせる」ことを望む空気の中で行われたように、憲法が国民の承認に付されるのは、多くの場合大きな政治的転換点においてである。権力の側がその必要性を喧伝することも不可避であろう。そうであればいっそう、国民投票によって権力への適切なコントロールを課すために、一人でも多くの市民が、自ら政治を担い、合理的に権力のコントロールに参加し得る存在であることが必要だ。それは、

---

53 辻村前掲『フランス革命の憲法原理』126頁。



諸々の制度的条件とともに、国民投票を「民意による政治」の手段とするために不可欠の条件である。

1795年憲法は、1793年憲法と同様に国民投票によって圧倒的多数で承認された憲法である。しかし、その承認のあり方は、パリに着目する限り同じではない。これを些細な違いと切り捨てることはできない。多様な見解が、権力に対する「神秘的な期待」を排して、政治に自覚的に参加する市民によって自由に表明され得るか否か。その僅かな差から見えるものは、21世紀の日本にも存在する根本的な問題だからである。

\* 本稿は平成22年度専修大学研究助成「フランス1795年憲法承認の国民投票について」、2011年～2016年度（予定）科学研究費・基盤研究（C）「フランス革命期における憲法承認国民投票の実態」の交付を受けた研究成果の一部である。